



市民や関係職員も参加した議員研修会

議長あいさつ・飯島進 「戸草ダム」建設の促進を

長谷地区の美和ダムは昭和34年に完成。「三六災害」の時は既に稼働中でした。美和ダムがもし無ければ飯田・下伊那の下流域では更に被害が拡大していたことは明白です。
想定外の災害が日常的に発生する今日の気象状況を考えれば、天竜川最大の支流・三峰川の治水のためにも「戸草ダム」の建設促進が急がれます。



昭和36年6月、伊那谷全域に甚大な豪雨・暴風被害をもたらした「三六災害」から60年。近年の異常気象を踏まえ、命と郷土を守る行動についての議員研修会が、「道路・戸草ダム問題等特別委員会」と共同で、天竜川上流河川事務所の大森秀人副所長を講師にお招きし、7月13日に開催されました。その模様を中心にレポートします。

「三六災害」から60年と 防災対策」

天竜川上流河川事務所
副所長 大森秀人氏



◆「三六(さぶろく)災害とは

昭和36年6月、台風の接近と梅雨前線停滞により、伊那谷では1週間年間雨量の3割を超える豪雨(飯田観測所・総雨量579ミリ)に襲われた。降り続いた雨の結果、伊那谷各所で河川氾濫、土砂災害、土石流、地すべり、がけ崩れ等が発生し、死者・行方不明者136人を出した。

◆土砂災害の発生

山室川の旧高遠町芝平地区では地すべりが顕著となり、河川の氾濫や土砂崩れもいたるところで発生した。三峰川上流の旧長谷村戸草地区では、家屋4戸や森林鉄道が流出し、奥浦地区では地すべりで多くの家屋が被災した。芝平、戸草、奥浦などの地区は災害後集団移住することになった。大鹿村の大西山崩壊では、家屋39戸が破壊され、42人の命が瞬時に奪われ、災害史上まれに見る惨事として記憶されている。

◆災害伝承の取り組みに

三六災害から60年が経ち、災害経験者の高齢化等に伴い、災害に備えるための知恵や教訓が後世に語り継がれず、資料が散逸したり、記憶が風化するおそれがある。



土砂に埋まった家屋(伊那市長谷杉島)

参加者の声

『防災へ細心の準備を』

市区長会長 小澤登志男

梅雨のさなか「三六災害」研修会に出席。今の地球環境下で災害が発生していない日はない。私たちは半世紀以前に恐怖の体験を得ている。スクリーンを覗くと更に身震いも起きた。あなどることなく、細心に準備をし、生活していく事が肝要であると示してくれた勉強の場であった。

『教訓を生かす重い責務』

市危機管理課 小松剛

私にとって三六災害は歴史資料の中にある災害でした。防災担当となりこの災害を学び、地域住民にとって川の恵みと恐怖は一体であると知りました。ひとつの事例で終わらせない、またあの時以上はないという安全神話にしないために、当時の教訓を生かす責務が私たちにはあると感じます。